



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行 / カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第十五主日A年（2026年7月12日）

主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 55 章 10－11 節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 8 章 18－23 節

福音朗読：マタイによる福音書 13 章 1－9 節（短い形式）

三つの朗読から

第一朗読では「神の言葉の働き」がテーマとなります。神の言葉は目には見えませんが、天からの雨のように降ってきます。それは、まるで種のごとく、人の心に蒔かれます。そして、その人を成長させ、再び神の元へと帰っていきます。11 節にある「わたしの言葉」を見てください。「言葉」はヘブライ語でダバールといいます。これは文字通り「言葉」を指すと同時に、「言葉」によってなった事実をも指します。『創世記』の冒頭で神は「言葉」（ダバール）で創造のわざを行います。が、「言葉」は事物にいのちを与え、存在するものとします。つまり、「言葉」は「存在」と結びつくのです。今日の朗読箇所での「言葉」とは、記号のようなものではなく、「いのち」を与えるものなのです。

第二朗読では、神の言葉をここに蒔かれた人が体験する「うめき」がテーマとなるでしょう。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」（ロマ 8 章 14 節）とパウロは確信をもって言い切ります。しかし、「神の子」でありながらも、現実の生活の苦しみの中で希望への「うめき」を発しながら生きていくのが人生なのかもしれません。「うめき」とは、第一朗読との関連で考えてみると、ここに蒔かれた種が芽を出すときの苦しみ、種から「いのち」へと移ろうときの痛みなのではないでしょうか。実際、イエスさまも「うめき」ます（マコ 7 章 32, 34 節参照）。「うめき」ながら生きる人間への深い共感がイエスさまの中にあるからです。

20 節に「虚無」とあります。ギリシア語でマタイオテースといいます。「空、空虚、はかないこと」などを意味します。新約聖書では三回だけ使われています（エフェ 4 章 17 節、2 ペト 2 章 18 節、ロマ 8 章 20 節）。

そのうちの二つは、「愚か」、「無意味」と訳されていますが、まさに人間が神から離れた状態。その空しさを言い表しています。『エフェソの信徒への手紙』では神から遠く離れ、放縦

な生活にふける異邦人を「愚か」と言い放ちます（４章１７節参照）。『ペトロの第二の手紙』では偽教師を「無意味」な大言壮語する者たちと断罪しています（２章１８節）。

今日の第二朗読では、これら二つの用例とは異なった意味合いがあるように思われます。なぜなら、前の二つは神から離れた空しさ、人間の行いによる空虚さですが、『ローマの信徒への手紙』では、確かに、人間は被造物であるにもかかわらず自分自身を神のように捉えてしまい、神との関わりを忘れてしまって「虚無に服しています」。しかし、それは「服従させた方の意志によるもの」です。つまり、神によって引き起こされた、神に起因する「虚無」、「空しさ」なのです。神へと向かう一つのステップとして被造物は今、「空しさ」を体験しながら「共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（２２節）のです。希望のある「虚無」、「空しさ」といってもよいでしょう。

福音朗読は「種蒔く人」のたとえ話ですが、種蒔く人は、ひたすら蒔き続けます。必ず実りがあると信じて。種蒔く人はイエスさまです。イエスさまは神の言葉を語り続けます。たとえ、敵対する人、受け入れない人、あざ笑う人がいようとも。それはイエスさま自身が神の言葉によって生かされているからであり、神の言葉には力があると信じているからです。

ミサの朗読では省きましたが、１８節以下を見てください。もしかしたら、イエスさまが実際にお話になった「種蒔きの話」の本体は１－９節までだったのかもしれませんが。その後の部分は、福音書が成立していく過程で「種蒔きの話」を理解し、解釈した初代教会によってつけ加えられたのかもしれませんが。もともとのこのたとえ話のテーマは「種蒔く人」がいつも種を蒔き続けるというものだったと思います。それが初代教会の中でイエスさまのたとえ話を解釈した結果、信仰を堅く保つという理解へと変化していったのではないのでしょうか。

イエスさまのたとえ話は、それが語られた状況では聞き手にとってよく分かる、そして共感できる話だったのです。半農半漁で生計を立てていくガリラヤの人々にとって、このお話は自分たちの日常に則して理解してみるとよく分かったことでしょう。それこそ、ピンときたお話だったでしょう。しかし、ガリラヤの豊かな自然という状況から切り離されて、たとえ話だけが語られ始めると本来備わっていた生き生きとした意味は失われていきました。初代教会では神の国の福音を告げるイエスさまの言動に批判や疑問が生じたとき、それに答え、イエスさまのメッセージを説明するためにたとえ話を活用したようです。さらには、たとえ話を教訓のように受け取り、イエスさまの言葉を生活の規範や指針のように理解していったと思います。こうして今のような福音書が成立したのでしょう。